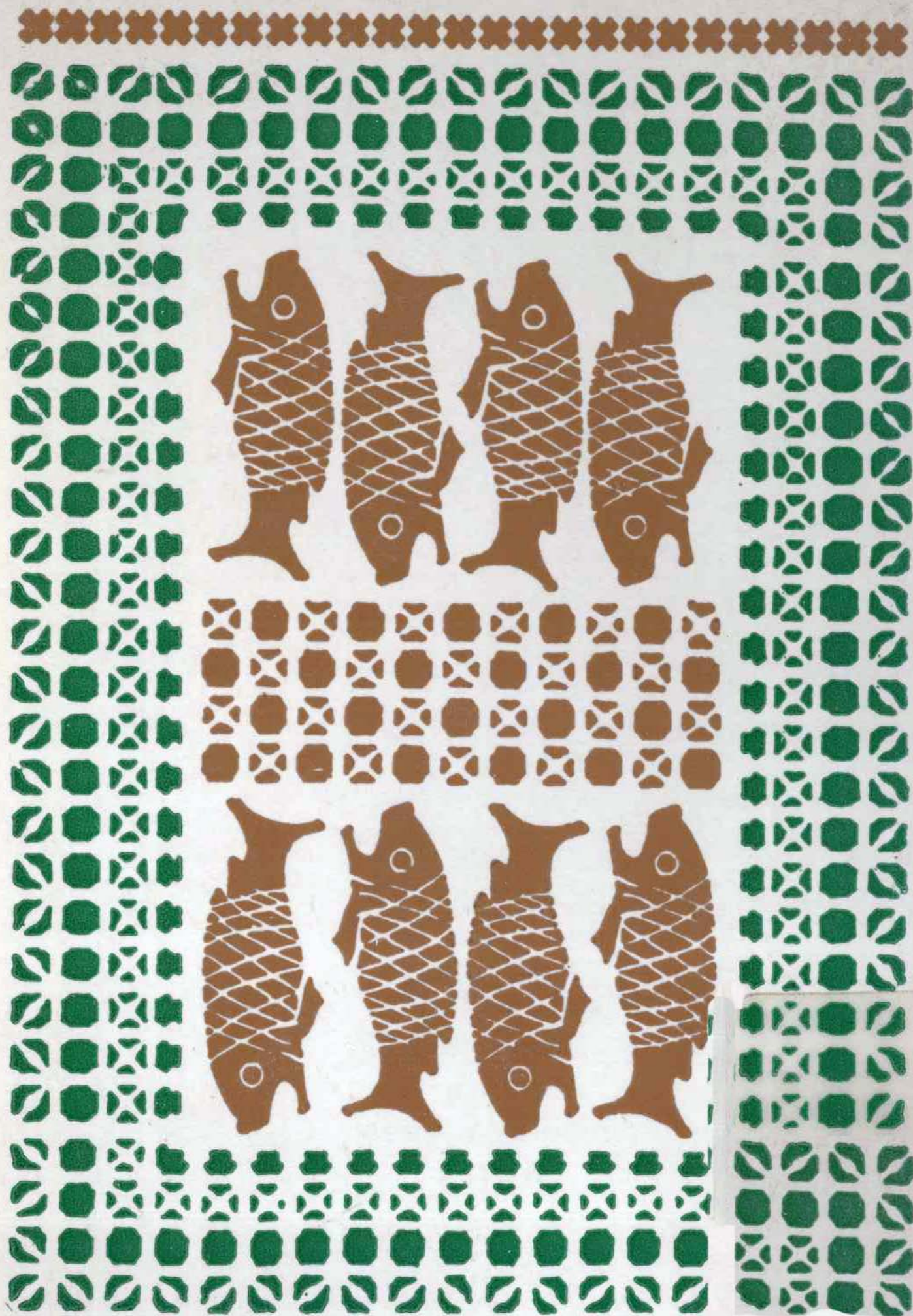


吉 重 木 八

詩と生涯と信仰

関

茂 著



新教出版社

八木重吉

詩と生涯と信仰

関

茂
著

関 茂 (せき しげる)

1935年、東京に生まれる。

日本聖書神学校卒業後、日本基督教団北千住教会伝道師、日本基督教協議会文書事業部、教文館出版部を経て、現在盛岡下ノ橋教会牧師

著書「青年と読書」(日本YMCA同盟出版部)

現住所 盛岡内丸1番2號

八 木 重 吉 詩と生涯と信仰

© 1965

1965年7月31日 第1版第1刷

1985年9月10日 第1版第21刷

定価 650 円

著 者 関 茂

発 行 者 森 岡 巖

印 刷 所 カシヨ印刷株式会社

発行所 株式会社 新 教 出 版 社

162 東京都新宿区新小川町9の1

振替・東京8-9991 電話・260-6148

1216-641121-6100 (日キ販)

はじめに

八木重吉は、おそろしく孤独な詩人であった。三〇歳のとき、妻と愛児ふたりをのこして病没するまで、彼が詩作した期間はわずか六年であった。その短い間に、彼はおよそ一六〇〇篇におよぶ作品を書いたのである。どれもこれも、これ以外にもこれ以上にもうたえないというようなさびしい純粹な詩ばかりであった。

重吉は無名詩人であったから、彼の詩を読む者もいるはずはなかった。だが、重吉は、いつか読んでくれるであろうだれかを胸にえがきつつ、ひとすじにうたいつづけたのである。没後、遺族が彼の原稿や所持品を整理してみたら、少数の友人からきた手紙が、同人誌の事務連絡のハガキにいたるまでたいせつに保存されてあった。そして、重吉がその友人に宛てた手紙は、ほんの二、三通しか発見されなかった。

つまり、彼の交友関係はそれくらいせまい範囲にかぎられていたのである。彼は、妻と、おさないふたりの子どもと、もうひとり、イエス・キリストだけを相手として、なにごとかに耐えつつその短い生涯を生きぬいた。重吉の詩に、ひとすじつらぬくものがあるのは、彼の生涯

がまたなにものかによってつらぬかれていたからである。さびしくてたまらないような孤独も、いじらしいほど悲しい感じも、たんなるムードやセンチメンタリズムにおわらなかつたのは、そのせいである。

いつからともなく、そしてだれということなく重吉の詩は読まれるようになり、読まれたところではどこでも、清らかな感動をあたえた。かつての無名詩人八木重吉の名が、ひとびとの胸に忘れられぬものとなったのはここ二〇年ばかりのことである。それは山奥の谷合いに発見された清冽な流れのように、読む者のところをうるおしてやまない。

それでは、八木重吉とはどんな人間であつたか、その短い生涯のあいだ、ときにつぶやくように、ときにふき上げるようにして生み出された作品はどんなものであつたか、それとこれとどんなつながりがあつたか、書いてみることにしよう。こんにち、重吉の愛読者は多いが、彼の生涯と作品を見渡した書物は一冊もないからである。まだ重吉を知らない読者にも、きっといい詩人を知つたとおもっていただけるであらう。

生命は短く、芸術はながい。八木重吉を知ることとは、人生における美しくとうとい体験のひとつであるとおもう。

目次

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・一

I 八木重吉の生涯・・・・・・・・七

荒野の家庭・・・・・・・・九

さびしい父・・・・・・・・一四

生いたち・・・・・・・・一九

青春・・・・・・・・二四

出会い・・・・・・・・二九

結婚・・・・・・・・三三

幸福と影・・・・・・・・三九

桃子・・・・・・・・四三

Ⅱ

キリスト	拾て身のねがい	発病	昇天	八木重吉その後	残された妻子	最初の追悼記事	『貧しき信徒』	聖家族	不幸な時代	山雅房版『八木重吉詩集』	出会い——吉野秀雄	廃墟のなかの詩	井上良雄の眼	無名時代の終り
三	七	六	七	七	九	八	九	九	一〇	一五	一九	二四	一九	三五

Ⅲ

墓前の二人・・・・・・・・・・・・・・・・	一三〇
『定本八木重吉詩集』の完成・・・・・・・・	一三五
八木重吉の信仰・・・・・・・・・・	一四一
「私はいま神を見た」・・・・・・・・	一四三
現臨感と遍在感・・・・・・・・・・	一四八
ひとりの相手に惚れぬく・・・・・・・・	一五七
白熱の感想文「聖書」・・・・・・・・	一六四
一念称名・・・・・・・・・・	一七〇
矛盾と相剋・・・・・・・・・・	一八〇
苦しければ苦しいままで・・・・・・・・	一九〇
光と闇のかなた・・・・・・・・・・	一九九
あとがき・・・・・・・・・・	二二七

I

八木重吉の生涯

雲雀

烟道のふちのせえに 連たて

枯（腰）をかけ

桃ふと 並んで

雲雀の鳴くのをまいておた



荒野の家庭

とみ子という、美しく可憐な妻に満足できないはずはない。もともと、好きて選んだ相手である。熱烈な求婚のすえ、ようやく実現したスイートホームか、なんてたのしくないはずかあらう。その恋女房との間に、すてに二児をもうけている重吉である。

それなのに――

詩人草野心平は書いている。

「家庭はいかにも温暖そうなのに、彼の顔はみぞれのようにさびしそうだった」。

大正一四年春のことである。

草野は、重吉に会うために、千葉県柏の彼の家をたずねたのだった。上野から常磐線でおよそ一時間、いまの柏市は、そのころはまだへんぴな寒村だった。千葉県東葛飾郡千代田村柏が重吉の住む場所だった。

常磐線のふみきりを渡って北へ少し行くとさびしい野原のまんなかに、ま新しいちっちゃな家が四軒建っていた。どれも同じような形の家だったのは、来る途中の道っぱたにあった、こ

れもまた新築らしい東葛飾中学校の付属の建物、つまり職員住宅だったからだ。重吉は、その校長にとくに望まれて、四月から教鞭をとるようになった二八歳の英語科教諭なのである。

草野は、その小さな家にあがりこんで、初対面の重吉と相対した。前年、草野が、宮沢賢治・土方定一・三好十郎といった連中と出していた同人雑誌『銅羅』（どら）に、重吉をさそったのがきっかけで、きょうの訪問となったのである。草野は二三歳だった。

話は、おもに同人誌のこと、また同人たちのこと、いろいろにおよんだ。しかし、重吉はいって口数少なく、おとなしかった。子供っ気の抜けない純な重吉にくらべたら、五つも年下なのに、草野の方が不敵な面がまえをしていた。

重吉は静かで、そしてきちょう面だった。たとえば、新聞の切り抜きなどは、ていねいにノートにはりつけてある。購読しているのが読売新聞なのか、その新刊紹介欄などが、順序よくはりつけてあった。いなかに住んでいても、重吉は、新刊書には気をくばっているようであった。

風来坊の草野は、話の合い間には、小さな家のなかをあちこち見まわした。新約聖書などが目につき、「ははア、八木はクリスチャンなんだナ」と草野は思った。夫人のとみ子が、さめるとお茶を入れかえた。そのたび、そまっなお茶菓子をすすめた。なかなかの気のくばりようだった。小さく愛らしく、おとめのような人妻だった。

サイダーの空きびんに水がつがれて、咲いたばかりのつばきの花がさしてあった。これは、あの奥さんがしたにちがないと草野は思った。

しみじみと静かで、あたたかで、いい家庭だった。だいたい、風来坊には、家庭というものはなつかしいものだ。永遠の郷愁みたいなものだ。重吉の家は、それをあらためて感じさせるようなところがあった。

そのうえ、「まんまるい」子がふたりいた。ひとりは一歳になる長女桃子。もうひとりが、この一月元旦に生まれたばかりの長男陽二だった。まんまるで、ちびっこい子供ふたりに、愛らしい夫婦——聖書——サイダーのびんにつばきの花……文句なしにいい風景、ほほえましい家庭だった。

たとえば、稀有の詩人・童話作家、宮沢賢治は、重吉より六年のちの昭和八年、三八歳で生涯を閉じている。彼は、その短い生涯を通して、意識して妻帯を避けた。それが、「野原ノ松ノ林ノ陰ノ小サナ萱ブキノ小屋」と言えるあの羅須地人協会を拠点とした、農民への献身運動のエネルギーとなり、また流れるような詩と珠玉のような童話作品を結晶させる元素となった、と言える言える。同じく、稀有と言える稀有の童話作家新美南吉は、昭和一八年、三〇歳で死んでいる。彼もまた結婚することがなかった。童話全集三卷（大日本図書株式会社、昭和三五年）が毎日出版文化賞・産経児童出版文化章を受けるにいたり、小学教科書からラジオ・テレビに

登場しているほどの作品を残した彼も、生前はきわめて不遇であった。そして、賢治と同じような病気に倒れ、ついにあたたかい家庭を知ることがなかった。

それにくらべて、昭和二年、三〇歳で亡くなった、同じく稀有の詩人八木重吉には、まことに人の目もうらやむほどの恵まれた家庭があった。愛妻と愛児ふたりにかこまれた彼は、安定した教員という職業に専念し、一心に詩作をすればそれでよかった。

それなのに――

草野心平はまた書いている。

「八木重吉はさびしく、そしていかにも孤独であった」。

なぜだろう――

人間、不足を言えばキリがない。幸福も、なれてしまえばありがたさが減る。満足も、時がたてば不足をおぼえる。しあわせすぎてかえって不安、ということもある。重吉も、外見に似ず、案外不幸だったのだろうか。

ところが、そのころの詩に、こういうのがある。

まことに 愛にあふれた家は

のきばから 火をふいてるようだ

（愛の家）

おそらく、放課後の道を、学校からほんの二、三分しかない家に向かいながら、ふっと浮かび出たものだろう。近づく家からは、桃子のひとりごらしい無心な声が洩れてくる。それに陽二のややむずかる声がまじって——のきばには、とみ子がしたくする夕げのけむりがうっすらとただよっている……食前の祈りをして、子どもふたりをあやしながら、たのしく夕飯をたべよう……。ふと見れば、広漠たる荒野のはての松林に、まっ赤な夕陽が落ちるところだ。早く家にはいろう……自分は「ただいま」と言い、とみ子は「おかえりなさい」と言う。このつがないきょう一日のうれしさ……。

それは、重吉の実感だったろう。家庭的に不幸な人間が、どうしてその家庭を「愛の家」と見、「のきばから、火をふいてるよう」に感ずることができるか。

まさしく、重吉にとって、この家庭はかけがえのないほどしあわせであり、たいせつなものであったのだ。しんそこ、そう感じていたからこそ、彼はこれをうたいえたのだ。

にもかかわらず、どういうわけで、「家庭はいかにも温暖そうなのに、彼の顔はみぞれのようになびきそうだった」（傍点、関）のであろうか。重吉の詩の大半が、この柏時代に生み出されていることをおもえば、このことはたいせつなのである。

さびしい父

木の香も新しい、東葛飾中学校の教室である。イガグリ頭の生徒たちを前に、英語科新任教諭八木重吉の、齒切れのいい英書講読が続く。

「スプリング ハズ カム、

ウィンター イズ オーバー……」。

とにかく、重吉は、英語にかけては、鎌倉師範在学中（大正元年―六年、重吉一五歳―二〇歳）から抜群の成績だった。テキストの一卷も二巻も先を学んでいて、英語の時間はまさに重吉の独壇場だった。授業一〇分前には、「八木、これ教えてくれんか」と、たくさんの級友がハエのように寄ってくるというありさまだった。

その重吉が、ひきつづき二四歳で東京高等師範学校文科第三部（英文科）を優秀な成績で卒業し（大正一〇年）、のち丸四年、兵庫県御影師範学校の英語科教諭として経験を積んだ。とくに信任をえて、この東葛飾中学校に転任してきたというのも、それだけの重吉の手腕が見込まれてのことであった。したがって、同僚と生徒の尊敬と期待のうちに、新しい教壇に立った